

韓性峰氏報告へのコメント

高 榮蘭

こんにちは。ご紹介いただいた高榮蘭と申します。先ほどの孫歌さんの講演から、非常に興味深いお話を伺いました。ご講演を伺いながら、もしかしたら私は「東アジア」という言葉を日本語で覚えたかもしれない、ということに気づきました。

「東アジア」という言葉が前提として存在するのではなく、言語的、歴史的、社会的文脈によって違う意味合いを持つ可能性があるということが、非常にわかりやすく提示されていたと思います。だとすれば、われわれがここで中国・台湾・韓国・日本など、現在の国民国家の境界に基づいて、それぞれの国の状況を報告するということは、逆にいわゆる「東アジア」をめぐる共同性、というよりは、その違い、ずれというものを浮き彫りにすることになるのではないかと。なぜかといえば、さきほどからよく出てくるのが「文化地図」というものですが、文化の地図をめぐる、われわれはもしかしたら違う文化的な想像力、あるいは文化的な地図を描いているかもしれないと思ったからです。さきほど孫歌さんが「東アジア」という概念自体が想像力によって充填されている、想像力によってつくられた地図である、とおっしゃいましたが、その文脈でわれわれは本日の集まりについて考えざるをえないのではないかと感じました。

私は日本の近代文学を研究しております。ですから、韓性峰さんの「韓流」に関するお話について、十分な議論が出来ないかもしれません。先ほどの丸川さんの発言で面白かったのは、「皮膚感覚」と世界史的な文脈の「あいだ」への視点を獲得することについてです。私の発言は、もしかしたら「皮膚感覚」に留まっているものでしかないかもしれませんが。にもかかわらず、今日はまず「韓流」という言葉を媒介としながら、われわれの持っている感情の記憶を、未来に向けてどのように拓い

ていくべきなのかについて、韓さんのお話を手がかりとしながら、述べさせていただきます。

今日の韓さんのお話は主に、韓国を「作る側」に位置づけし、その戦略に関する話だったと思います。一点目はコンテンツに関する話、もう一点目はそのコンテンツが流通するインターネットなどの環境についてのお話だったと思います。私は韓流についてはあまりに詳しくありません。ですから、今の韓流が世界のあらゆる所でどれくらいの力を持って波及しているのか、ということに関する細かいデータは持っておりません。

今日は日本だけに限定してお話をさせて頂きたいです。私は94年の来日以来、今18年くらい住んでおりますけれども、その18年間の経験のなかで、いわゆる「韓流」とよばれる現象を経験したのは、後半の7、8年くらいです。その7、8年の間で、2回にわたって韓流というものが非常に力を持って浮上してきているんですけれども、最初の韓流ブームは、みなさんもよくご存じだと思いますが、「冬のソナタ」ですよ。第二次ブームは、「少女時代」に代表されるK-POPの話になるかと思っています。

私が「韓流」現象に興味深いと思ったのは、いわゆる「韓流」が日本で力を持つことによって、日本の社会のなかに偏在していた、ジェンダーの問題や、階級の問題を露呈させたのではないかと、ということを感じたためです。例えば、「冬のソナタ」による第一次の韓流ファンと、今「少女時代」が好きな若い韓流ファンは、持っている感情的な記憶や、歴史的な記憶、あるいは社会的に置かれている位置というものがさうとう違うわけですよ。例えば、第一次韓流ブームに関する面白い話をうかがったことがあります。それは韓流ブームが新宿のデパートを再編させたという話です。比較的に高年齢の「女性」をターゲットにしなが

ら、京王デパートが改装をしたのは、まさに「冬のソナタ」ブームの最中だったと思います。ですから、伊勢丹はおしゃれが好きな若い人も取り込むために店内を変え、そしてそのあとに、小田急が30代から40代の女性、いわゆるOLという枠組のなかに括られている女性たちをターゲットに改装をしていきます。正確な分析かどうかわかりませんが、当時のメディアでは、韓流ファンと同世代の「女性」をターゲットに取り込むために、京王のデパートが完璧に改築をした、と語られていました。

それまで「中高年」の「女性」に「欲望＝購買力」があると思われなかった。いや、むしろ「中高年」の「女性が欲望を持つてはならない」という抑圧が強かったかもしれない。このような考えは資本主義と家父長制が結託して作り上げた構図を土台としていると思います。「女性が欲望を持つてはならない」。それを、言い換えると、「中高年」の「女性」は「既婚者」としてイメージ化され、しかも「家族」のために犠牲を払うことが求められていたわけです。韓流ファンは、そのレールからの脱走を図っていると捉えられ、女性の反乱という言葉で定義されることも多いです。しかし、企業の方は、自分のために消費をする購買層があることに、改めて気づいてわけで、それが先ほどのデパートの改装という逸話を生むことになったわけです。すなわち、ここからは、資本主義を拠り所とする家父長制度からの逸脱、しかし、それすらも取り込もうとする資本の論理という複雑な構図が見られるわけです。

一方、韓さんは、社会学者らの論を援用しながら、それに「オタク」という言葉をあてはめて、AKB48のファンとの類似性に注目しています。しかし、第一次韓流ブームのファンは、つねに「古き／良き」高度成長期の「日本一過去」を語る言葉から自由ではなかった。ここには、過去へのベクトルが強烈に作動していたわけです。それに対し、第二次韓流ブームのファンは異なる文脈に置

かれているような気がします。

「少女時代」が好きな方たちは、「AKB48と少女時代はライバルではない」という。お互いに利益を共有している可能性すらあるのです。それはなぜかといえば、受容する側が完璧に分かれているからです。AKB48はわりと男性のファンが多く、「少女時代」は女性ファンが多い。それに加えて、「少女時代」のファンには高校生を中心として比較的若い方が多いです。だから浮いてしまっているのは、われわれが教えている大学生で、どっちつかずの状態になってしまっているのでは思ったりします（笑）。

では、現在、韓流という記号を新たに生み出している人々についてもう少し考えて見ましょう。私が日大に就職する前に、世田谷区と新宿区で「日本語適応指導」（抑圧的な言葉ですが…）、つまり日本語がわからない外国人の児童のために、日本語の授業をしたり、小学生向けの国際理解教育をしたりしていました。第一次韓流ブームが終わったといわれていた時期に、小学生向けの授業で、「韓国の食べものを知ってる？」という質問に対し、ある小学生が「キムチ」と答えたんです。その時、何人かの小学生が「いや違う、それは間違ってるよ」と言ったんですね。なぜだと聞くと、「キムチは韓国の食べ物じゃなくて、日本の食べ物だから」と言うんです（笑）。今、計算してみますと、その小学生達が、ちょうど少女時代のファン層と同じ年代になっているんですね。

だから、受容者の側に立って、韓流ブームを捉えてみると、過去へのベクトルを常に作動させる第一次韓流ブーム、しかも、時期的には小泉元首相の靖国問題など、日本と韓国の微妙な歴史的、政治的問題の介入を常に受けていた第一次韓流ブームとは違って、第二次韓流ブームはすこし異なる視点からアクセスする必要があると思ったのです。それが果たして何かということですね。そこに私は非常に興味を持ちました。なぜかといえますと、例えばBoAを見てみますと、安室奈美恵が

産休に入ったときに、まさに安室奈美恵の継承者であるかのように、現われました。彼女のナショナルアイデンティティが強く前掲化されてはいなかったわけです。また、そのときに、私が韓国に帰って驚いたのは、BoA が巻き髪をしていることだったんですよ。非常にかわいい服をきています。日本だったら、まっすぐなストレート髪で、安室奈美恵を連想させるようなリズムカルな踊りを披露するはずなのにそうではなかった。韓国と日本の大衆文化における受容コードの違いを意識せざるをえませんでした。しかし、BoA の人気は絶頂に達していたときに、日本の音楽市場に入ってきた東方神起は違う形で商品化されていた。最初から、日韓同時発売を意識していた。同じ歌、同じ服、同じダンス。違いがあるとすれば、言語だけなのです。それが何を意味するのか。それは、韓国と日本において、文化を受容する際の「皮膚感覚」が非常に近くなってきている。すなわち、文化的なコンテンツを受け取る側の感覚が、非常に近づいてきているということなんですね。

この現象を韓性峰さんの言葉を借りて表現すると、グローバリズムの文脈で韓流ブームを捉えることになるかもしれません。韓さんは、グローバリズムの問題を、「アメリカ」に対する「韓流」という構図でおっしゃっていました。そこに、新自由主義の問題を接合させると非常に興味深い構図が浮かび上がるのではないかと思います。なぜかといえば、例えば、地方のシャッター商店街を再生させるために、スターバックスを誘致しようという署名運動があったという話をうかがったことがあります。スターバックスが進出してくると、商店街ももう少し元気になるのではないかと。韓国の場合も同様な現象が起きているような気がします。私は光州出身ですが、私の中学時代にロッテリアがつぶれたほど、食に関しては「保守的」なところでした。しかし、にもかかわらず、今ではケンタッキー・フライドチキンがあり、マクドナルドがあり、コンビニも日本のコンビニが

たくさん入っています。三角のおにぎりも人気だそうです。食文化の均質化が進んでいることは確かです。そういう意味で言えば

マクドナルドも世界のあらゆる場所にあり、注文の仕方もほぼ同じですね。この「均一化」の問題をどのように考えればよいのか。だから、文化の問題を考えるときには、われわれは新自由主義を批判しながらも、その新自由主義的な資本の広がりや、日々消費していながら生きていることを意識しなければならない。それに対して、抵抗したり、拒否したりすることは、日常の中でほとんど不可能な形になっているのではないのでしょうか。

時間があまりないようなので、纏めに入りたいのですが、ここで申し上げたいと思ったのは、新自由主義の文脈で考えたときに、韓流の「受容」について、それがどのような可能性を孕んでいるのかについて考えるべきだと思いました。言い換えれば、このような文化パワーを支えている土台に対する、「抵抗」の問題です。2008 年、韓国で大きなロウソクデモがあったときに、高校生の参加者の多さに驚きました。済州島で米軍基地に反対するデモがあったときにも、沖縄のほうから若い活動家が連帯を表明してきています。ですから、第二次韓流ブームは、「公共性」だけでは見えてこない、違う意味での「可能性」があるのではないかと考えました。新自由主義的な枠組の中で、文化受容のコードまでが均質化しつつあるのは確かです。しかし、この「均質化」の問題に、むしろ、「均質化」を強いるものへの抵抗をめぐる連帯の可能性が秘められているのではないかと思います。異なる社会のあり方への模索、あるいは未来に向けた新たな感情記憶の構築を試みるためには、この「均質化」というのが、逆に「連帯」を生み出すための感情の共有、新たな形での記憶の再構築へとつながるのではないかということを感じました。そこに、韓流ブームの可能性が秘められているのではないのでしょうか。

96 韓性峰氏報告へのコメント

御静聴ありがとうございました。

(こう よんらん・ 日本大学)